

公開授業科目： 「英語 11A」(外国語科目)
授業担当教員： 教育開発系 ドライアー ブライアン 助教
開講日時・場所： 平成21年6月9日(水) 2限、203講義室

授業について

共通教育センターとして初めて外国語科目の公開授業を実施した。教育開発系のドライアー先生は1年生の英語習熟度別クラスでは上位クラスを担当されており、入学後間もない1年生の授業がどのように進められているのかを拝見する機会を得た。授業は事前に配布された教材と当日配布された教材の両方を使用し、ごく一部の内容を除いて英語のみで進められた。英語を母国語として使用する教員でなければできない授業構成にこだわった教授法であった。教材も今年就任した米国オバマ大統領の就任演説と過去の米国大統領の就任演説を比較するタイムリーなもので、時折学生を指名して緊張感を保つ工夫や身振り、手振りを交えた欧米人らしい動きも印象的であった。クリアな発音を心掛けているようで、話すスピードも早すぎず、遅すぎずといった様子で、授業の進度を上手にコントロールして、決まった時間内に配布した資料内容を終える手際の良さは見習うべき点も多い。

討論について

授業後の討論では参加した教員から様々な感想が寄せられ、ドライアー先生からも細かい内容に踏み込んだ発言もあった。「自分自身が話し続けること」、「同じフレーズを繰り返し使って説明すること」、「できるだけ自分の話をに入れて話すこと」、「わかりやすいテーマを設定すること」に心掛け、学生の学習履歴を知らなくても学生が理解できるように工夫をし続けていると話していた。一方でなかなか思うように学生が答えてくれないという悩みもあるようで、教員が熱心に取り組めば、学生も努力すると信じて授業に臨んでいるとのことであった。また、受動的になるSpeakingよりも能動的で必要度の大きいReadingとWritingを重視して授業を進めており、1年生は新鮮で授業は大いにやりがいがあるとの発言があり、単なる英会話重視とは大きく異なる見方、考え方を聞くことができたのは大変興味深い。

参加した教員からは前方の席の学生と後方の席の学生の熱心さの違い、後半は学生が答える場面が少なくなっていた点、指名されて答えた後の学生の気が抜けた様子、メモをとる学生の少なさについて指摘があった。また、米国の歴史背景に対する本学学生の理解度に関する質問や、どこまで予習しておくことを求めているのかという質問も出た。しかし、基本的には外国人教員らしい視点で授業を捉えて進めていることに肯定的な意見が多かった。特に、学生参加型の授業であること、英語で理解して英語で答える環境に追い込まれた状況での緊張感、さらには参加教員自身が学生時代に経験できなかったアクティブで斬新な内容というコメントが印象的であった。今後もこの授業に後方の席で参加することを希望する教員もいて、教員にとっても魅力のある授業となっているようである。

これから本学では英語教育が強化される方針であるが、学生の緊張感を保ちつつ、新鮮な授業形態を持たせ、実践的な技能を身に付けさせる外国人教員による英語教育を比較的英語能力の高い学生に提供することは質の高い実践的な技術者養成に大いに寄与するものである。